

保育所を利用する保護者が保育士に悩みを相談する条件
－保護者へのインタビューを通して－

Conditions that parents using a nursery school talks about their troubles
with nursery teachers:

Analysis of interviews with parents

鶴 宏史, 中谷 奈津子, 関川 芳孝

TSURU Hirofumi, NAKATANI Natsuko, SEKIKAWA Yoshitaka

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 12 号 2017 年

【原著論文】

保育所を利用する保護者が保育士に悩みを相談する条件
ー保護者へのインタビューを通してー

Conditions that parents using a nursery school talks about their troubles
with nursery teachers:
Analysis of interviews with parents

鶴 宏史* 中谷奈津子** 関川芳孝**

TSURU, Hirofumi* NAKATANI, Natsuko ** SEKIKAWA, Yoshitaka**

要旨

本研究の目的は、保育所を利用する保護者がいかなる条件であれば保育士に自らの悩み相談するのか、相談前から相談後までの過程、子育て困難に対する相談のしやすさと生活困難に対するそれは同質か、の3点を明らかにすることである。保護者にインタビューを実施し、その逐語録をKJ法を参考に分析した結果、1)【日常的な保護者へのアプローチ】、2)【信頼される保育所運営】、3)【地域の交流】の基盤条件、4)【保育士としての行動特性】、5)【敷居の低い相談対応】、6)【相談場所であることの周知】の誘因条件、7)【対人援助技術の活用】、8)【相談内容に応じた具体的対応】の実践条件が浮き彫りとなった。これらの関連性は、基盤条件により保護者は保育士や保育所への信頼や安心感を深め、誘因条件によって話すことが触発され、実践条件で保護者の抱える課題が軽減される。結果、保護者は対応に満足し、さらに保育士・保育所への信頼が高まり、再び相談しようと考えたり、子育て以外の相談をしたりするようになる。今後の課題は、対象を広げて各項目の関連性などを含めて、量的データの収集・分析から実証的に検討することである。

1. 本研究の背景と目的

保育所の保護者支援は、保護者の抱える幅広い子育て課題に対応する。そして深刻な子育て課題ほどその背景に、子育て以外の生活困難¹があることが多い。そのため、保育士には相談援助に関する知識や技術、様々な生活困難を見定めた対応が求められる。

しかし一方で、保護者は、自分自身の悩みの相談相手として保育士を認知しておらず²、深刻な課題を抱える保護者ほど支援に拒否的なことが多い³。

笠原(1999a)⁴によれば、子育てのことを誰に一番相談したいかという質問に対して、子育ての悩みの中で母親自身にかかるストレスは配偶者に、子どもの発育や発達の遅れに関する悩みは小児科医へ、子どもの性格や行動についての悩みは保育士にと、悩みの種類に応じて相談したい相手が変わっていた。また、笠原(1999b)⁵では、保育者に限らず保護者に相談相手と認知された相手の特徴として、受容的態度、言語的対応の適切さ、良い点の指摘、指摘の明確さ、気軽さ・親しさ、交流・相談の場の提供、子どもを保育する能力、子育て経験を明らかにした。同時に、保育士や幼稚園教諭への相談の実態

や要望に対して、保育者の人柄に加えて、保育者の保育能力が優れているかどうか、そして相談する時間や場所が関連すると指摘している。

さらに笠原(2004)⁶は、保護者の悩みを母親自身にかかるストレス、子どもの行動や性格についての悩み、発育・発達についての悩み、生活習慣の悩みに分類した上で、保育士への相談の有無を明らかにしている。それによれば、母親自身にかかるストレスに関する悩みを保育士に相談した母親は約30%で、それ以外のカテゴリーでは約40~50%が相談をしていた。

そして同調査で、保護者が保育士に子育ての悩みを相談するか否かに何に関わっているのかを明らかにした。それによれば、保育士に相談の専門性があり、相談する時間や場があることを保護者が認知すれば、保護者は自分の内面のつらさなどを保育士に打ち明けることが多くなる傾向にあった。また、子どもが喜んで保育園に通うなど保育の専門性の認知が高まると、子どもの行動や性格の悩みを開示しやすくなる。さらに、保育士が他の専門機関に照会してくれることが認知されれば発育・発達面での相談を促しやすいことを示唆された。同時に、保

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

** 大阪府立大学 (Osaka Prefecture University)

育士に相談した保護者たちは、概して相談したことに對する満足度が高く、何かあったら保育士に相談する気持ちが高いことが明らかになった。

また、望月・諏訪・山本（2008）⁷の調査では、保育所への要望として母親の40%強、父親の30%弱が、保護者と保育者が落ち着いて話せる場所と時間を改善するべきと考えていることを明らかにしている。また、保育者への相談のあり方と内容に関して、保育者に対して話すのにとまどいや不安を感じる保護者は相対的に少なく、約半数の保護者は精神的な励ましを求めているが、それ以上に具体的な助言を求めている保護者が多いことを明らかにした。この点は、前述した笠原（1999a;2004）^{8,9}の研究とも合致する。

このように先行研究からは、保育所や幼稚園を利用する保護者は、①保育者が保育の専門性を有しているか否か、②保育者が他の専門機関に照会してくれるかどうか、③保育者が相談援助に関する専門性を有しているかどうか、④保育所や幼稚園に相談する時間や場があるかどうか、をもとに保育者に相談するか否かを決定する傾向にあることが読み取れる。

しかし、保護者が保育者に自らの悩みを相談する条件に関する研究自体が少ない。また、先行研究では、保護者が保育者に自らの悩みを相談する条件を明らかにしているが、子育てに関する悩みに限定されており、子育て以外の生活課題に関わる悩みを相談する条件は明らかになっていない。そして、個々の条件は明らかになっていないが、相談前から相談後までの過程は明らかになっていない。

そこで、本研究では、保育所を利用する保護者がどのような条件であれば保育士に自らの悩みを相談するのか、また、相談に至るまでの過程を明らかにすることを明らかにする。その結果に基づいて、保育所を利用する保護者が、保育士に対して生活困難を抱えるときの相談しやすさと、子育ての困難に対する相談しやすさは同じ質のものか確認することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象と方法

調査対象者は、保育所の4歳児クラス、もしくは5歳児クラスの保護者（兵庫県2名、大阪府3名）とした。4歳児クラス、もしくは5歳児クラスの保護者を調査対象とした理由は、保育所の利用年月が長く、様々な保育士との関係、保育所での経験があると予想したためである。調査協力者は、筆者らの研修経験などに基づく機縁法によって行った。調査期間は、2014年2月～3月である。

研究協力者5名にインタビューガイドに基づく半構造化インタビューを行った。なお、兵庫県の2名は第一筆者が個別インタビュー、大阪府の3名は第二筆者がグル

ープインタビューを行った。兵庫県では各30分程度、大阪府では1時間程度の時間を要した。インタビューはプライバシーの守られる場所で行い、研究協力者の了解のもとICレコーダーで録音した。

(2) インタビュー内容（調査項目）

研究協力者が自らの言葉で自由に話せるように、話の流れを遮らないように配慮しつつ、以下の質問を行った。

- 1) これまで保育士に子育てに関する相談したことがあるか
- 2) 1)で「ある」と答えた場合：相談した理由／「ない」と答えた場合：相談しない理由
- 3) 1)で「ない」と答えた場合：どのような条件であれば保育士に相談するか
- 4) 子育て以外の生活の悩みを保育士に相談したことがあるか
- 5) 4)で「ある」と答えた場合：相談した理由／「ない」と答えた場合：相談しない理由
- 6) 4)で「ない」と答えた場合：どのような条件であれば保育士に相談するか

(3) 倫理的配慮

- 1) 保育所を通して、研究目的及び研究方法を記載した書面で研究協力を依頼し、同意を得た。インタビュー当日にも改めて口頭で説明を行った。
- 2) インタビューの日時は研究協力者の意向に沿うとともに、インタビューはプライバシーの守られる場所で行った。

なお、本調査は大阪府立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

(4) 分析方法

KJ法¹⁰を参考に、以下の手続きをとりながら分析を行った。

- 1) ICレコーダーに録音した内容をすべて起こし、逐語録を作成した。
- 2) 第一筆者と第二筆者がそれぞれ逐語録を読み込み、インタビュー内容の2), 3), 5), 6)に該当する文書セグメント（意味のまとまりごとに分割）を抽出した。
- 3) 第一筆者と第二筆者がそれぞれ抽出した文書セグメントを検討した。内容が一致するものは採用し、一致しないものについては両者で検討した上で採用するか否かを決定した。採用された文書セグメントには通し番号を付した。
- 4) 抽出された文書セグメントは、意味内容の類似性に基づいて分類し、それぞれ表札を付帯した。その際、全ての表札と文書セグメントの記述を総覧し、表札

と記述の整合性を確認した。

- 5) 全ての表札を意味内容の類似性に着目してさらに分類を行った。これら一連の分類作業は、3段階にわたって実施され、その後、第三筆者を加えて、表札間の関係性を探り図解化を行った。

結果の整理にあたって、1段階目で分類されたものを小項目と呼び<>で示す。2段階目で分類されたものを中項目と呼び〔 〕で示す。3段階目で分類されたものを大項目と呼び【 】で示す。

3. 結果

(1) 保育士への相談について

保護者5名全員が女性（母親）で、子育ての悩みも、子育て以外の生活の悩みも保育士に相談をしていた。

(2) 分類された項目

逐語録から合計134の文書セグメントが抽出された。1段階目の分類で50の小項目が形成され、2段階目の分類で19の中項目が形成された。3段階目の分類で1)【日常的な保護者へのアプローチ】、2)【信頼される保育所運営】、3)【地域の交流】、4)【保育士としての行動特性】、5)【敷居の低い相談対応】、6)【相談場所であることの周知】、7)【対人援助技術の活用】、8)【相談内容に応じた具体的対応】の8つの大項目が形成された。

表1は大項目から小項目の一覧であり、図1は大項目の内容と関係を空間配置したものである。なお、表1と図1のイタリック体の中項目及び小項目は、子育て以外の生活の悩みを保育士に相談した理由のみで構成されたものである。

1) 【日常的な保護者へのアプローチ】

保育士が保護者に対して「こまめな声かけ」をすることや保護者に「小さな変化への気づき」や「園の状況の説明」を伝えることで、保護者は安心感を得るとともに保育士への信頼を寄せるようになることが浮かび上がった。

- ・「あ、気づきました？」みたいな感じで、そういうところからね、会話が弾める

また、保育士が「子どもを話題とした意図的な会話」をし、「子どもの成長を喜び合う」ことで、保護者は保育士がわが子のことを理解していると感じ、保育所や保育士に対して信頼を強めていくことが語られた。

このように、保育士の日々の保護者への関わりが保護者に安心感を与え、信頼関係を築く基礎となることが示された。

2) 【信頼される保育所運営】

保育所が保護者に信頼されるような運営をすることが保護者に安心感を与えるとともに、保育所への信頼を高めていることが示された。

保護者は、日々の送迎や行事などを通して、「質の高い日々の保育業務」「個人としての子どもの尊重」「子どもの可能性への信頼」「子どものペースに即したかわり」といった保育所の「質の高い保育業務」を実感し、安心感を覚えていることが語られた。

- ・最後の最後まで先生は彼らの本人の力を信じて見守って、ずっとこう後押ししてくれてた。本人のもとと持つてる力を信じて教育してくれてたんだ

同時に、「園内職員の円滑なチームワーク」を目の当たりにすることによって、保護者は安心感を得ていた。

また、保護者は、保育士との関わりの中で保育士の「専門性向上のための努力」を感じ取ったり、保育士が「子どものケガに対する説明責任」などの「保育の説明責任」をきちんと果たすのを見たりして、保育所への信頼感を高めていることが浮き彫りになった。

3) 【地域との交流】

保護者が、保育所は身近な頼れる場所であり、保護者自身を含めて他者とつながれる場所だと認識することが、保育所への信頼を高めることが示された。

例えば、保育所を「日常的な拠り所」と感じ、多大な信頼を寄せるとともに、最も頼れる場所として認識していることが語られた。また、保護者が、保育士は子どもだけでなく保護者自身のことも気にかけていると感じ取り、保育士による「親同士の関係構築」を認識すると、より保育士への信頼感が高まることも語られた。

さらに保護者が、保育所は卒園児の保護者の受け入れや地域の子育てを支える取り組み、地域住民同士がつながるような取り組みといった、「在園児以外の多世代の受け入れ」を行っていることを認識すれば、子育てやそれ以外の悩みについても相談してもよいのだという安心感を覚える内容が見られた。

4) 【保育士としての行動特性】

保育士のコンピテンシー（職務や役割における効果的ないしは優れた行動に結果的に結びつく個人特性）が、保護者が保育士に相談するか否かのきっかけになることを示された。例えば、保育士の「笑顔」「話しかけやすい雰囲気」「忙しい姿を見せない」を見たり、保育士の「子どもへの愛情」「人への興味」「高いコミュニケーション力」を感じ取ったりして、保育士に話をしようと決断していることが浮かび上がった。

表1 保護者が保育士に自らの悩みを相談しようとする要因

大項目	中項目	小項目 (セグメント数)
1) 日常的な保護者へのアプローチ	日常的な保護者へのアプローチ	こまめな声かけ (2)
		子どもを話題とした意図的な会話 (1)
		子どもの成長を喜び合う (1)
		園の状況の説明 (3)
		小さな変化への気づき (4)
2) 信頼される保育所運営	保育の説明責任	子どものケガに対する説明責任 (を果たす) (2)
	質の高い保育業務	質の高い日々の保育業務 (3)
		個人としての子どもの尊重 (1)
		子どもの可能性への信頼 (1)
		子どものペースに即したかかわり (3)
	園内職員の円滑なチームワーク	園全体の職員による子どもの認知 (1)
		園内職員の円滑な連絡体制 (2)
		園内職員の連携 (1)
	専門性向上のための努力	保育士としてのプライド (1)
		スキルアップのための自己研鑽 (5)
3) 地域の交流	日常的な抛り所	日常的な抛り所 (6)
	親同士の関係構築	親同士の関係構築への企図 (6)
	在園児以外の多世代の受け入れ	卒園児の保護者の相談の受け入れ (2)
		在宅子育て家庭の行事への参加の勧奨 (3)
		多世代を対象とした行事の実施 (2)
4) 保育士としての行動特性	保育士としての行動特性	笑顔 (3)
		話しやすい雰囲気 (がある) (3)
		忙しい姿を見せない (1)
		子どもへの愛情 (1)
		高いコミュニケーション力 (3)
		人への興味 (1)
5) 敷居の低い相談対応	相談ニーズの読み取り	相談したい気配の察知 (3)
	敷居の低い相談対応	表情から親の気持ちの読み取り (1)
		親の心配ごとの予測 (1)
		細かいことへの相談対応 (1)
		園内あらゆる場所での相談対応 (6)
6) 相談場所であることの周知	相談場所であることの周知	相談場所であることの周知 (2)
	関係機関への窓口	関係機関とのつながり (6)
		関係機関への照会 (1)
		関係機関の紹介 (2)
7) 対人援助技術の活用	カウンセリングマインドに基づく基本的姿勢	傾聴 (3)
		受容 (3)
		個人としての親の尊重 (4)
		親の気持ちへの共感 (2)
		保護者に対する優先的な受け止め (2)
		保護者の不安をあおらない対応 (1)
	親の生活背景への理解	親の生活背景への理解 (3)
8) 相談内容に応じた具体的対応	丁寧な子ども理解に基づく保護者対応	丁寧な子ども理解 (5)
		子どもの姿に基づく情報提供 (3)
		子どもの姿に基づく見通しの提示 (5)
	保護者のニーズを見越した積極的対応	保護者のニーズを見越した積極的対応 (1)
	専門的な解決方法の教授	傾聴に基づく提案 (2)
		専門的な解決方法の保持 (3)
		専門的な解決方法の教授 (2)
	深刻な相談に対する個別的対応	深刻な相談に対する個別的対応 (1)

- ・来ててもすごく「おはようございます！」っていうその一言からして笑顔です。先生が。すごい支えられてるかもしれん。
- ・相談しようと思ったのは、まずはやっぱり担任の先生が話しやすいことがあります。

5)【敷居の低い相談対応】

保護者の非言語的ニーズを踏まえて保育士から対応したり、保護者が細かいなと感じる内容に丁寧に対応したり、さらに保育所内のどこでも話ができる雰囲気をつくることで、保護者が保育士に相談しようと思うきっかけになることが示された。

保育士が、保護者の＜相談したい気配の察知＞して対応したり、＜表情から親の気持ちの読み取り＞ながら、＜親の心配ごとの予測＞をして対応したりするという「相談ニーズの読み取り」を行うことで、保護者は相談してもよい気持ちになったり、また相談したくなったりすることが語られた。

- ・声かけてくれますね。何か聞き出そうって、さっきもおっしゃってましたけど…。「今日どうしよう、言おうかな」ってもしこっかが目で先生を探すなり、「なんか言おうかどうか。でも、いないからいいわ」っていうような時もありますよね。そういうときでも、必ずその気配を察知されるんですね。
- ・「あれ、聞いてかんなん」って思って来たときとか「あ、こんなこと言っておかないといけないな」って思った時には、必ず先生のほうから「あ、おかあさん！」って声がかかる

また、保育士が＜細かいことへの相談対応＞を行ったり、＜園内あらゆる場所での相談対応＞を行ったりすることで、保護者は気楽に保育士に相談してもよいと感じるようになることが浮かび上がった。

6)【相談場所であることの周知】

保護者は、保育所が相談をしてもよい場所だと認知すれば相談をしようと考えることが示された。

保護者が保育士に相談するきっかけとして、保育所と＜関係機関とのつながり＞があるという、保護者の認識があることが語られた。さらに、保護者がわが子に関することを相談した際に、保育所が＜関係機関への照会＞をしたり、＜関係機関の紹介＞をしたりすると、保育所への信頼感が高まり、今後も相談したくなることが浮き彫りとなった。

また、掲示などを通して、保育所が子育て以外の悩みについても「相談場所であることの周知」がなされていれば、保護者は保育所において子育てに関する悩みだけ

でなく子育て以外のことの相談をしてもよいと認知していることが語られた。

7)【対人援助技術の活用】

相談の際、保育士がカウンセリングやソーシャルワークの原則に則って保護者に関わると、保護者は保育士を信頼し心を開くことが示された。

保育士が＜保護者に対する優先的な受け止め＞をして、保護者の話を＜傾聴＞し、＜親の気持ちへの共感＞や＜個人としての親の尊重＞の態度を示し、＜受容＞するとともに、＜保護者の不安をあおらない対応＞をすることで、保護者は安心して話をするができることが浮かび上がった。

さらに、保育士が「親の生活背景への理解」を示すことで、保護者の保育士への信頼感が深めることが語られた。

- ・お母さん疲れて帰ってきてて、これからまた家事をして大変だろうっていうその後のことも考えてるか、ちょっとした時間を大切にしてくれているなあとすごく感じます。
- ・「働きながら子育てもして、お母さんたちも大変ですよね」っていう気持ちをもってくださいます

8)【相談内容に応じた具体的対応】

保護者は相談の際に、自分の話を聞いてもらっただけなく、相談の内容に応じた具体的な対応を求めていることが示された。

保護者の相談に対して、保育士が「丁寧な子ども理解に基づく保護者対応」をすることで保護者は安心感を覚え、さらに「保護者のニーズを見越した積極的対応」や「専門的な解決方法の教授」を保育士が行うことで、保護者は相談してよかったことが語られた。

また、「深刻な相談に対する個別的対応」を丁寧に行うことによって、保育士への信頼が深まったことが語られた。

- ・まあもちろんすごく深刻な話だったりすると逆に先生が気を遣って、うちの主人の倒産とかいろいろあったときの話とかは他のお母さんがいないときに切り出してくださるとか、そういうのがあったので、その辺の配慮ももちろんあったし、時間が許す限り話を聞いてくれる。

4. 考察と今後の課題

(1) 項目間の関係性

本研究の結果から、保護者が保育士に自身の悩みを相談する条件とその過程は以下のようにまとめられる。

保護者は、保育士の【日常的な保護者へのアプローチ】を通して保育士や保育所に信頼を寄せる。同時に【信頼される保育所運営】や【地域との交流】を目の当たりにすることによって、保育士や保育所に対して安心感を持つとともに信頼を深め、「何かあれば相談しようかな」という感覚が無意識的・意識的に育まれていく。このような日々の関わりなどから保護者と保育士の信頼関係が醸成され、相談のための基盤が整う。【信頼される保育所運営】を通して、【日常的な保護者へのアプローチ】や【地域との交流】が職員間でも共有されていると考えられ、両者に影響を与えていると思われる。

その安心感と信頼感が根底にあり、保護者が主に子育てに関する困難を抱える際に、【保育士としての行動特性】によって保護者は相談しやすい雰囲気を感じ取る。そして、保育士の【敷居の低い相談対応】によって保護者は話すことが触発される。また、保護者への【相談場所であることの周知】は、保護者が安心して保育士に悩みを相談する誘因となる。

実際に相談が始まれば保育士が【対人援助技術の活用】によって保護者に接することで、保護者は保育士を信頼し、心を開き様々なことを語り出す。保育士は保護者の話を聴くだけでなく、【相談内容に応じた具体的対応】をすることで、保護者の抱える悩みが軽減される。この結果、保護者は保育士の対応に満足し、さらに保育士や保育所への信頼が高まり、これらを基盤に再び相談しようと考えたり、子育て以外の悩みを相談したりするようになる。

以上が、保護者が保育士に自身の悩みを相談する条件と相談の過程である。【日常的な保護者へのアプローチ】、【信頼される保育所運営】、【地域との交流】の3つの項目は、直接的に保護者が保育士に悩みを相談するための条件ではないが、保護者の保育士や保育所に対する安心感と信頼感を与えることから、相談のための基盤条件といえる。笠原（1999a）¹¹で示された、保護者に相談相手と認知された者の特徴である「気軽さ・親しさ」、「子どもを保育する能力」、「交流・相談の場の提供」とも一致しており、保育士の日々の業務や保護者への関わり的重要性が示唆された。

【保育士としての行動特性】、【敷居の低い相談対応】、【相談場所であることの周知】の3項目は、保護者が悩みを抱える時に相談を決断させる直接的な条件と考えられることから、相談の誘因条件といえる。【保育士としての行動特性】は日々の保護者との関わりの中でも重要であり、こうした行動特性が保護者の保育士と話をしたい気持ちを増幅させるとともに、悩みごとを相談するときのきっかけになると考えられる。【敷居の低い相談対応】においては、保育士が「相談ニーズの読み取り」を丁寧に行いながら保護者に声をかけることによって、〈細か

いことへの相談対応〉や〈園内あらゆる場所での相談対応〉が可能となろう。

また、笠原（2004）¹²の研究で示唆された、保護者が保育士は他の専門機関に照会することが認知されれば子どもの発育・発達面での相談を促しやすいことと、【相談場所であることの周知】の下位項目である〈関係機関への窓口〉は一致していた。つまり、保育所の他機関への仲介、協働や連携の重要性が保護者の立場からも示された。また、保育所が〈相談場所であることの周知〉をすることは、保育士が相談援助に関する専門性を有しているかどうかを保護者が認知するための物理的手段として有効だと考えられた。

【対人援助技術の活用】と【相談内容に応じた具体的対応】は実際の相談に関わる条件であるので、相談における実践条件といえよう。笠原（1999a）¹³で示された、相談相手と認知された者の特徴である「受容的態度」、「言語的対応の適切さ」、「良い点の指摘」がこの2つの大項目と一致しており、保護者に共感的に関わることに加えて、それぞれの保護者の相談の内容に応じた対応の重要性や保育士が相談援助の知識や技術を有することの重要性が明らかになった。

これら8つの項目はそれぞれに重要であるが、前述したように、基盤条件、誘発条件、実践条件が循環的に機能することによって、保護者は保育所や保育士への信頼を高め、主に保護者自身の子育ての悩みを保育士に相談する。相談後、悩みが解消されるとその対応に満足し、子育てやそれ以外の困難が生じたときに再び相談をすることが示された。こうした一連の過程が、先行研究で示された、保護者の保育士が相談援助に関する専門性を有しているかどうかの認知や、保育所に相談する時間や場があるかどうかの認知にも寄与していると考えられた。

（2）子育て以外の生活困難の相談

保護者が、保育士に対して生活困難を抱えるときの相談しやすさと、子育てに関する悩みに対する相談しやすさは同じ質のものか確認する。

前述したように、基盤条件、誘因条件、実践条件が循環的に機能することによって、保護者は保育所や保育士への信頼を高め、保護者の子育てに関する悩みだけでなく、それ以外のさまざまな生活上の悩みを保育士に相談することが示されていた。ただ、両者の悩みについてその条件を比較した際に、共通する項目が多く、相談しやすさの質の違いについて明確に読み取れなかった。

個々の条件を見た場合、【地域との交流】の下位項目である「在園児以外の多世代の受け入れ」と、【相談場所であることの周知】の下位項目である「相談場所であることの周知」は、子育て以外の生活の悩みを保育士に相談した理由のみで構成された項目である。

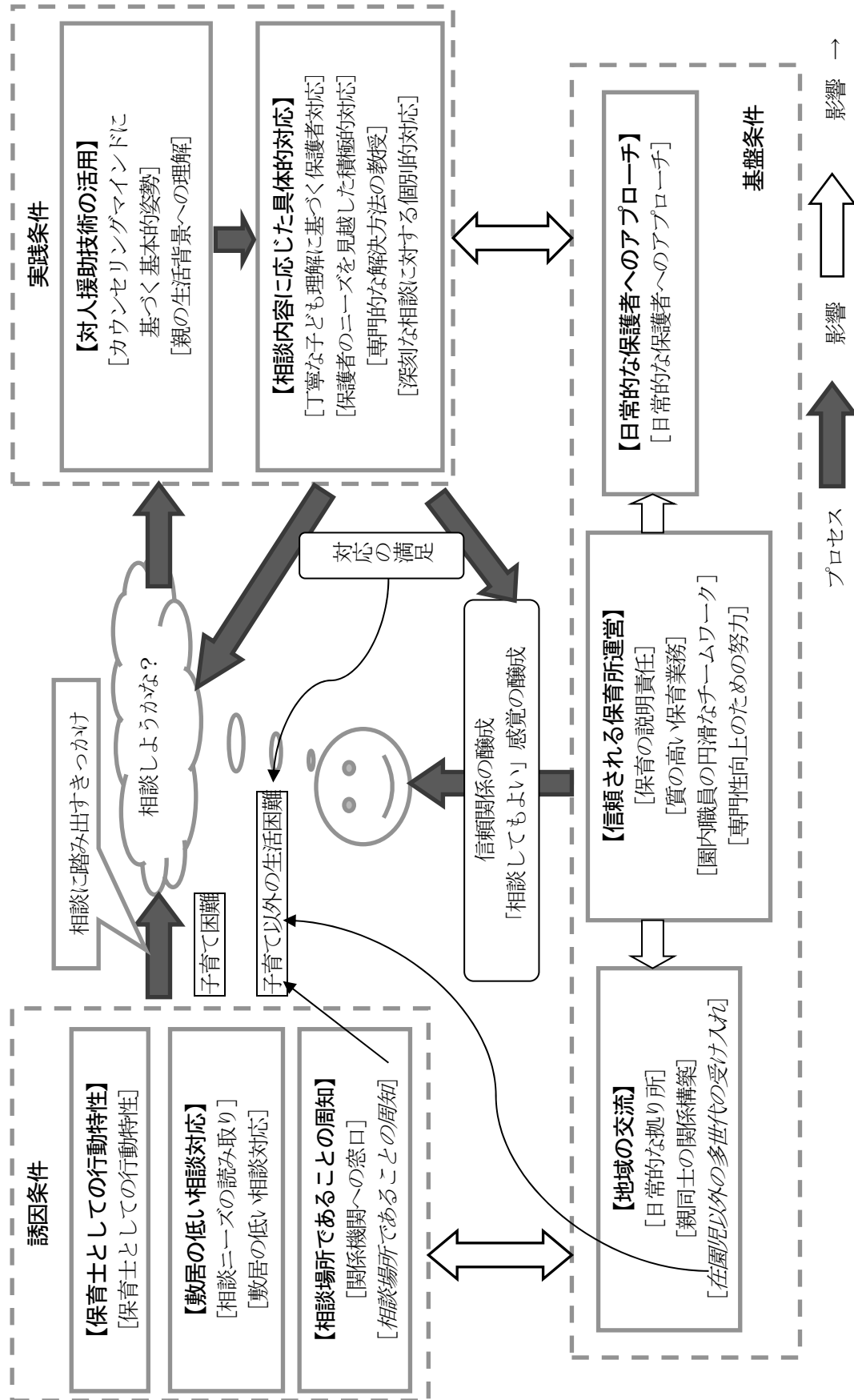


図1 保護者が保育士に相談をする条件と相談過程の全体図

〔在園児以外の多世代の受け入れ〕において、保護者は、保育所において卒園児の保護者の相談や地域子育て支援、さらに地域住民との交流の様子を見ており、保育士が子どもだけではなく様々な世代に関わり、対応する力があると認知したと考えられる。さらに、保護者は保育所そのものに子育て以外のことを受け入れる土壌があると判断したとも考えられた。

〔相談場所であることの周知〕は、子育て以外のことも相談できる旨の掲示があり、それを保護者が見ることによって、それを認識し、子育てに関する相談だけでなくそれ以外のことで悩んだ時に保育士に相談するきっかけになると考えられた。

以上から、この2つの条件がある場合、保護者が子育て以外の生活困難を相談する可能性はより高くなると推察された。

(3) 今後の課題

本研究において、保護者が保育士に自らの悩みを相談する条件を明らかにし、その過程を整理したことで、保育所や保育士が行うべき内容や姿勢などが示唆された。しかし、いくつかの課題が残された。

まず、保護者が、保育士に対して生活困難を抱えるときの相談しやすさと、子育てに関する悩みに対する相談しやすさは同質のものか確認することはできなかった。例えば、保護者が保育士に初めて相談をした内容について明らかにするなど、インタビューガイドを精査した上での再調査が求められる。再調査を通して、この課題について取り組んでいきたい。

次に、今回の調査では、対象者を「保育所を利用する保護者」とし、性別にこだわらずに依頼したものの、結局のところ母親のみのインタビューとなった。これは本研究の限界といえる。父親からみた相談のしやすさの条件は異なることも予想される。今後は父親を含めた調査を行いたい。

最後に、各項目の関連性などを含めて、量的データの収集・分析から実証的に検討することが求められる。

【付記】

- * 本論文は、日本保育学会第 68 回大会（2015 年 5 月、椋山女学園大学）の口頭発表「保育所における生活課題を抱える保護者への支援（3）」の原稿を大幅に加筆修正したものである。
- * 本論文は、科学研究費補助金（基盤研究 C 研究課題：保育所における生活困難の早期発見・早期対応と保育所の組織運営に関する研究 課題番号：25350936 研究代表者：中谷奈津子）の成果の一部である。

－注－

- 1 ここでいう生活課題とは、保護者の健康、経済、就労、教育、家族関係、社会関係・社会参加に関する困難と捉える。これらは、岡村重夫（1983）の社会生活の基本的要求に基づいている。社会生活の基本的要求とは、①経済的安定、②職業的安定、③家族的安定、④保健・医療の保障、⑤教育の保障、⑥社会参加ないし社会的協同の機会、⑦文化・娯楽の機会をいう。岡村はこの 7 つの要求を充足する過程の困難を社会生活上の困難と規定した。本研究では、⑦は⑥に含めることにする。
- 2 笠原正洋「保育園児の保護者が子育ての悩みを保育士に相談することに何がかわっているのか」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』36, 2004, pp.25-31.
- 3 谷口泰史『エコロジカル・ソーシャルワークの理論と実践－子ども家庭福祉の臨床から－』ミネルヴァ書房, 2003.
- 4 笠原正洋「育児相談において保護者がとらえる保育者の対応について」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』31, 1999a, pp.21-27.
- 5 笠原正洋「保育者による育児相談への保育者の意識」『保育学研究（日本保育学会）』37(2), 1999b, pp.191-199
- 6 笠原, 2004, 前掲論文.
- 7 望月彰・諏訪きぬ・山本理絵「子育て中の父親・母親が保育園に望んでいること」『発達』114, 2008, pp.26-33.
- 8 笠原, 1999a, 前掲論文.
- 9 笠原, 2004, 前掲論文.
- 10 川喜田二郎『KJ 法－混沌をして語らしめる』中央公論社, 1986.
- 11 笠原, 1999a, 前掲論文.
- 12 笠原, 2004, 前掲論文.
- 13 笠原, 1999a, 前掲論文.

－参考文献－

- 1 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝「保育所における生活課題を抱える保護者への支援の課題－保護者支援・保護者対応に関する文献調査から－」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』63, 2015, pp.35-45.
- 2 岡村重夫『社会福祉原論』全国社会福祉協議会, 1983.
- 3 鶴宏史・中谷奈津子・関川芳孝「保育所における生活課題を抱える保護者への支援の課題－保育ソーシャルワーク研究の文献レビューを通して－」『教育学研究論集（武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻）』11, 2016, pp.1-8.
- 4 鶴宏史・中谷奈津子・関川芳孝「保育所における生活困難を抱える保護者への支援（3）－保育所内における役割分担－」『日本保育学会第 68 回大会発表要旨集』